

視察報告 

2020年8月27日 福井県 コロナ禍の原子力防災訓練

感染症対策と原発事故時の避難は両立しない



避難の問題点が一層浮き彫りに



2020. 9. 10

避難計画を案ずる関西連絡会



福井県原子力防災訓練 視察報告

8月27日（木）、避難関西を案ずる関西連絡会は福井の市民と共に、福井県主催の原子力防災訓練を視察しました（福井から3名、大阪・兵庫・滋賀から5名が参加）。

今回の福井県原子力防災訓練は、およそ一月前の7月30日に改定されたばかりの「高浜・大飯地域の緊急時対応」および「原子力災害における新型コロナウイルス感染対策ガイドライン」^{※1}に基づき、感染症流行下に原子力災害が起こった場合、被ばくによるリスクと新型コロナウイルス感染拡大のリスクの両方から、いかに住民等の生命・健康を守るか手順を確認するというもので、全国初の訓練でした。

訓練を通じて、感染症対策と原発事故時の避難が両立しないということが一層明らかになりました。住民の安全を守るためには、少なくとも感染症蔓延下では、原発の運転を止めなければなりません。

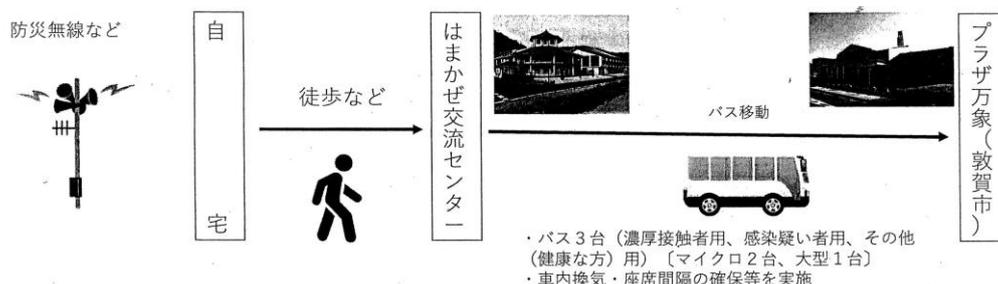
※1：おおい町ガイドライン（第1版） http://www.town.ohi.fukui.jp/1001/1206/40/p20231_d/fil/1.pdf

（上記URLはおおい町作成のガイドライン。訓練当日に配布された内閣府（原子力防災担当）と福井県作成のガイドラインはネット上では公開されていない。内容はほとんど同じもの）

■ 訓練の概要 福井県資料より

- ・ 訓練想定 感染症が発生している中、若狭湾沖で震度6弱の地震が発生し、大飯原発3号と高浜原発4号が同時に発災し、全面緊急事態に至る。
- ・ 日 時 2020年8月27日（木）9:00～15:00
- ・ 対象地区 おおい町大島地区（避難住民25～30名）
- ・ 訓練内容
 - ・ 一時集合施設開設訓練（検温（関電サーマルカメラ使用）・問診、部屋隔離など）
 - ・ 屋内退避訓練（陽圧化の模擬体験・備蓄食の実食など）
 - ・ バスによる住民避難（バス分車、車内換気、座席間隔の確保など）
 - ・ 避難所開設運営訓練（検温・問診、部屋隔離、間仕切り設営など）
- ・ 訓練時間

時 間	内 容
9:00	会場設営開始
10:00	住民への情報伝達（防災無線など）
10:20～11:40	はまかぜ交流センター運営訓練（検温・問診、部屋隔離、陽圧化模擬、昼食）
11:45	はまかぜ交流センター出発（約1時間）
12:45～13:40	プラザ万象（敦賀市）運営訓練（検温・問診、部屋隔離、間仕切り設営）
13:45	プラザ万象（敦賀市）出発
14:45	はまかぜ交流センター到着（解散）



■ 訓練の特徴と問題点

○ 住民参加はわずか 50 名 :

訓練に参加した住民は、おおい町大島地区（5 km 圏内の P A Z）から 50 名で、避難先の敦賀市まで移動したのはその内 30 名だった。あまりにも人数が少ない。

○ 原子力防災訓練と言いながら、ほとんどが感染症対策の訓練 :

避難先に移動を開始するのは 11:45。その前の 11:20 には「緊急事態宣言」が発せられた（想定）。しかし、安定ヨウ素剤の服用指示はなく、一時集合場所（おおい町はまかぜ交流センター）の受付で「安定ヨウ素剤を自宅から持参したか」の確認もなかった。受付では検温が実施され、問診票の質問項目は感染症関係のものばかり。防護服を着ていたのは自衛隊だけだった。

○ 感染症対策の訓練

①30 名の移動にバスは 4 台必要。実際には多くのバスが必要になるが準備できるのか :

濃厚接触者用 1 台、感染疑いありの者用 1 台、通常の避難者用 2 台。通常の訓練では 30 名の避難にはバス 1 台で済むが、このように区分けする必要がある。しかし、実際の事故時に、福井と関西で 20 万人以上が避難することになれば、自家用車での避難を考慮しても、バス等の避難手段は足りなくなる。

②密は避けられない :

一時集合場所でもバスでも、窓をあけて換気することはできない。被ばく対策を優先するため、感染症対策は同時にはできない。

③避難所は不足する :

避難先の敦賀市プラザ萬象小ホールは定員 400 名の広さがある。福井県のマニュアルに沿って、2m の通路と一人 4 m² を確保して間仕切り作成等の訓練が行われた。小ホールは 30 名弱のスペースでいっぱいになっていた。

○ U P Z や要援護者の避難訓練はなし :

一時集合場所で安定ヨウ素剤を配布したり、スクリーニング検査が必要な U P Z での訓練は実施されず。上記の問題点だけからでも、多くの住民が対象となる U P Z では、感染症対策と両立させた避難が不可能なことは明らかだ。

○ 県外避難は可能なのか、兵庫県の自治体はコロナ禍でも受け入れできるのか :

福井県の県外避難先は、兵庫県の 22 市町となっている。感染症が拡大する中で、福井県から避難者を受け入れることが本当に可能なのだろうか。原発事故時の避難でさえ、要援護者の避難先の確保等は難しい。それに加えて、「濃厚接触者」等の避難所を別に確保したり、感染していない住民と区別して食事を準備すること等々は、極めて困難と思われる。

■以下で、訓練の具体的な状況を紹介します。

<一時避難場所・はまかぜ交流センター>

◆参加住民はわずか 50 名。その内約 30 名だけが避難訓練



視察参加者は住民が集合する少し前に到着しました。これまでの避難訓練ではマスクや見学者の受付は設置されていませんでしたが、今回は、感染者が出た場合を想定し、簡単な住所、氏名、電話番号を記入し、体温チェックをして問題なければ検温済みのカード（首から掛ける）をして取材等が許可されました。

訓練は、当日の朝 10 時に避難指示の放送が入り、住民は一時集合場所であるはまかぜ交流センター（おおい町）に集合することから始まります。しかし、住民の参加が約 50 名とあまりにも少なすぎます。その内、敦賀の避難所（プラザ萬象）まで移動したのは約 30 名だけです。

住民は受付を済ませた後、発熱のない一般避難者と発熱のある避難者を、廊下通路を段ボールで区切ってそれぞれの部屋へ別れることになっていました。コロナ対策と言いながら、受付での検温と、マニュアルに従って「気分は悪くないですか？」などの口頭確認のみで、濃厚接触者や感染疑いで自宅待機の状況下かどうかも自己申告です。そもそも、感染者は軽症者も含めて既にUPZ圏外の病院や施設に入院・隔離されているため自宅隔離の人はいないという前提なので、避難するのは健康な人と濃厚接触者と感染疑い者だけという設定でした。

避難待機中に発熱する可能性があるとのことで、避難者が敦賀に行く退出時にも体温測定をするために、関電の職員 4、5 名が一般側の入り口通路で原発内で使っている顔面モニターの体温測定ポール（サーマルカメラ）を持ち出していました。サーマルカメラは一度に一人ずつですが、50 cm から 1 m ぐらいで体温が測定できるそうです。



◆安定ヨウ素剤の持参確認や服用指示はなし

受付時 健康状態チェックリスト

記入日時 令和 年 月 日 時 分
 氏名 _____ 年齢 _____ 歳 性別 (男・女)
 連絡先 (携帯) _____

「はい」か「いいえ」に○をしてください

1	あなたは新型コロナウイルスの感染が確認されている人の濃厚接触者で、現在、健康観察中ですか	はい・いいえ
2	普段より熱っぽく感じますか	はい・いいえ
3	息苦しさや胸の痛みはありますか	はい・いいえ
4	においや味を感じないなど、味覚・嗅覚に異常がありますか	はい・いいえ
5	せきやたん、のどの痛み、鼻水、頭痛等、風邪のような症状はありますか	はい・いいえ
6	全身がだるいなどの症状はありますか	はい・いいえ
7	その他気になる症状はありますか はいの場合、具体的にご記入ください ()	はい・いいえ

PAZの大島地区は、放射性物質の放出前に避難する前提で、事前配布された安定ヨウ素剤を持参して避難することになっています。今回の訓練でも、避難所に出発する前に全面緊急事態宣言が出されるという筋書きなので、安定ヨウ素剤の持参・服用は必須です。ところが、避難所での問診票や受付での口頭確認のマニュアルには「安定ヨウ素剤を持参したか？」等の項目は全くありませんでした。住民が敦賀市へ避難を開始する前に「全面緊急事態」という事故想定でしたが、服用の指示もありませんでした。

◆一時集合場所では、簡易の間仕切りテントが密の状態です

はまかぜ交流センターでは、2m四方の天井のない簡易テントのような間仕切り24張りが、感染対策のため入り口が互い違いになるようにはなっていましたが、ずらっと並べられ密の状態でした。おおい町等のガイドラインでは、通路を含め前後左右に2mの間隔を設けることになっています(9頁資料参照)。マニュアル通りでもありません。住民は避難者カードを記入したのち、それぞれの間仕切りに一人が入って、試食を兼ねて保存食の昼食をとりました。濃厚接触者と感染疑い者の部屋はそれぞれに用意されており、その部屋にも間仕切りと簡易トイレが設置されていました。



◆自衛隊による防護服の着脱訓練

住民が昼食をとっている間、バス会社の社員が防護服の着脱方法を自衛隊員からレクチャーを受けていました。バスの運転手に感想を聞くと、「なかなかあの通りにするのは大変、水分補給はボトルから細かいチューブで飲むことが可能だが、排せつの方がかなり難しい」とのことでした。自衛隊員の話では、防護服は脱衣が重要で、特に暑い時期は早く脱ぎたいために最後の最後に被ばくや感染を起こす可能性があるとのこと。



◆30名の避難者にバスは4台必要

避難住民は、ここから避難先の敦賀市プラザ萬象にバスで避難します(数名は自家用車避難)。移動するのは約30名なので、通常なら大型バス1台で移動できる人数ですが、今回は感染予防のため「濃厚接触者用」と「感染疑い者用」、「それ以外の者(一般住民)用」に分けた上に間隔をあけて座るので、大型1台、マイクロ3台の計4台のバスが用意されました。

「濃厚接触者」用車両は自衛隊のマイクロバス(金沢ナンバー)で、運転者と助手席の2人も自衛隊員でゴーグル、厚手のゴム手袋、マスク、フェイスシールド、タイベック着用の完全防備。運転席と座席はビニールシートで仕切られており、すべての座席にビニールのカバーがかけられ、窓もビニールで覆われており、物々しい感じがしました。

濃厚接触者用のマイクロバスと内部



一方、「感染疑い者」用のマイクロバス(小浜の三福)の運転手は、エプロン、マスクとフェイスシールドくらいでした(「疑いあり」は、熱があるとか自主申告で体調悪いという想定の人ようです)。運転席の真後ろ2列(座らないように指示有)以外の座席にはシートがかけられていましたが、窓にはビニールはありませんでした。また、一般住民用のバスは、運転手がマスクをしているくらいで、何の養生もありませんでした。「濃厚接触者」2名と「感染疑い者」1名の役は、おおい町の職員でした。

11時45分、訓練参加住民は4台のバスに乗って敦賀市のプラザ萬象に移動しました。

<避難所・敦賀市のプラザ萬象>

◆避難所的小ホールは数十名でいっぱいになる

私たち見学者も、入口で検温と連絡先の記入を求められました。訓練で感染者が出た場合の連絡に使うのでしょうか。受付のあと、避難所になる小ホールと「濃厚接触者」と「感染疑い者」が入ることになる和室を見学しました。

<小ホール>

福井県のガイドラインに従って、小ホールにはあらかじめ2m幅の長い銀マットが2mの間隔で敷かれ、一人分が4m²になるように2mごとに印がつけられていました。この小ホールは400名の定員ですが、ガイドラインに従い分けると数十名で一杯



になりました。

壁際には3種類のテントが張られていました。たまたま現場に居合わせた敦賀市副市長から「テントは敦賀市の備品で、今日は見本として展示しているだけで使わない。」と聞きました。また、「プラザ萬象は通常は敦賀市民の避難所。大飯・高浜で地震のために原発で事故が起こったなら敦賀も地震の被害はあるはずで、敦賀市民を受け入れなければならない。そうなったら国や県に他の地域で避難所を考えてもらわなければならない」「今回は、感染が疑われる人とそうでない人を分けるということがポイント。コロナだけでなく冬場のインフルエンザの感染も重なったらさらに分けなければならず、とても対応しきれないのではないか」と話していました。

<濃厚接触者と感染疑い者の部屋>

濃厚接触者と感染疑い者の入り口は建物の横にあり、玄関を入ったところで「濃厚接触者」と「感染疑い者」の動線が段ボールで区切られ、それぞれの部屋への通路が作られていました。それぞれに和室（10畳）一部屋が用意されていましたが、部屋の中に仕切りがないため、複数人いた場合でも同じ部屋に居ることになります。



<バス到着>

12時49分、コロナ感染の心配がない一般住民の大型バスを皮切りに、次々とバスが到着しました。大型バスとマイクロバス1台から降りた一般住民は、ソーシャルディスタンスを守るため、屋外で間隔をあけて長い列に並んで受付を待ちました。今回の訓練ではコロナ対策で全員がマスクをしていること以外、半そで半ズボンの参加者もいるなど、放射能から身を守るために何らかの対策をしている人は見当たりませんでした。

受付担当の職員はマスクとフェイスシールド・感染防護用エプロンを着用していましたが、UPZ外とはいえ、原子力災害の訓練で防護服の着用がないのは問題です。また、避難住民も感染防護のためとはいえ、受付のために屋外で長時間並ぶことは問題です。また、ここでの受付も検温の体調についての口頭確認のみで、「安定ヨウ素剤を服用したか？」等の質問はありませんでした。検温と口頭確認の後、住民は小ホールに入りました。



<濃厚接触者と感染疑い者>



マイクロバス一台に乗ってきた「感染疑い者」1名は、タイベック着用の引率者に先導されて建物横の入り口に行き、そこで検温と健康状態の口頭確認が行われ、段ボールの廊下を歩いて入室しました。

その後、別のマイクロバス1台で到着した「濃厚接触者」2名も同様の受付で入室しました。

ただ「濃厚接触者」は靴の上にビニールのカバーを着けていたのですが、玄関で靴ごと脱いだ人と、和室の入り口まで履いていった人がいて、マニュアルがどうなっているのかわかりませんでした。どちらも和室に入るところまでが訓練で、3名とも講習を受けるため小ホールに移動しました。



◆段ボールベッドと間仕切りの組み立て練習だけ



小ホールでは、避難者がそろると、敦賀市職員による段ボールベッドの組み立てデモンストレーションと、数人の住民が組み立てを練習。その後、住民全員が二人一組になりパーティションの組み立てを行いました。パーティションを組み立てて片づけたらおよそ1時間の訓練は終わり、13時45分にバスが出発するとのことで住民は慌ただしく小ホールを後にしました。

この間、放射能はおろか原子力防災に関する説明は全くありませんでした。はまかぜ交流センターからプラザ萬象までの訓練で、住民が原子力防災について学んだことは、コロナ禍でもバスの窓は開けることはできず「密」になるということくらいでした。

<敦賀市運動公園体育館>

もう一か所の訓練会場の敦賀市運動公園体育館にも、短時間でしたが視察に行きました。

ここは、事前申し込みをした職員や放射線技師を対象にしたスクリーニングの講習会でした。講習会では、今頃サーベーターのラップの付け方講習から始めていることに驚きました。さらに、講師は「スクリーニング基準は4万cpm。基準を超えたらまず服を脱いでそれでも超えている箇所があれば、ウェットティッシュなどで拭く。それで大体基準値以下になります。福島でもそうでした。」と説明。福島原発事故の実態を全く無視した説明に怒りがこみ上げました。

<その他の訓練>

住民の避難訓練以外に大飯オフサイトセンターで現地対策本部を一元化した運営訓練も行われていました。モニター画面に映像はありませんが、杉本知事らが着席して「第1回原子力災害合同対策協議会」等開かれました。また、物資輸送訓練、緊急時モニタリング訓練等も行われていたようです。

[参加者の感想]

○感染症対策を入れた訓練は、人、場所、時間、バスなどの移動手段が数倍に膨らむことがわかりました。これにインフルエンザやノロウイルスなど他の感染症が生じたらどうするのでしょうか。また、今回の訓練では要支援者避難訓練、県外避難訓練が実施されず、屋内退避もされていません。さらに、UPZの訓練となると、一時集合場所で検温・問診、ヨウ素剤配布等相当に大変になるでしょう。スクリーニングも感染者とそれ以外を分けることになります。これまでに避難所としてある施設も、感染症対策を考えると余裕があるところなどありません。

そのため、ガイドラインでは親戚知人宅への避難も推奨していますが、感染リスクを考えると考えにくい選択肢です。ましてや、広域避難先の自治体での避難所確保が可能であるとは思えません。現実問題として、国の言う「防護措置」と「感染症対策」の両立は無理ということだと思います。最善の対策は、今すぐ原発を止める選択をすることだと思います。

○避難者の参加人数を絞ったのも、その人数しか集合場所に収まらなかったからで、移動手段も、通常の避難であれば1台で悠々のはずが、4台の車を用意しなければならないなど、コロナ禍では、集合場所の選定、移動手段の確保、避難先の確保等、通常以上に大きな課題が山積。

[資料]

「原子力災害における新型コロナウイルス感染症対策ガイドライン（第1版） おおい町」より

http://www.town.ohi.fukui.jp/1001/1206/40/p20231_d/fil/1.pdf

【一時集合施設等レイアウト例（SEまで）】

※施設敷地緊急事態（SE）までの間は、感染防止対策のため、施設外で受付を実施する。

